ヘルベルト・アイゼンライヒの『ある耽美家』（一九五三年）について

ライナー・ケネッケ　著
竹岡　健一　訳

■作品

それを見たときついに、彼はくずおれた。彼はその間ずっと持ちこたえていたが、それは彼にはひど過ぎた。そして、彼は言った。「ここでも、下の方でも、町は丁度カーニバルの時期に、ダンス・パーティーの時期に入ったのでしょう。カーニバルの時期に、踊りに行き、楽しみに行き、パーティにいれば、美しい女性と一緒にいたいということを、おわかりになりませんか？　太りすぎて、もう身体を動かせないとすぐわかるような女ではありませんよ。しかも、彼女は二三時間おきに吐くのです。おわかりになりませんか？　それどころか、実際私たちには、もう子供が一人います。今二歳くらいです。ところがこの子のときがそうでした。もう思い出したくもありません。彼女が太り、二三時間おきに吐いたとき、私が別の部屋で眠ったことを、みんな知っています。彼女の様子が本当にひどかったことを、みんな証言できます。ところが、今もうまた一人。しかも丁度カーニバルの時期に、彼女は太って、醜くなるでしょう。すべての人々が踊りに行き、楽しみに行くカーニバルの時期に。カーニバルの時期に、踊りに行きたい、楽しみたいと思うのは、罪ではありま

せん。美しい女性と一緒にいたいと思うこと、太って、動けず、醜く、ヒステリックな女とではなくてです。だれもがその人を振り返り、背後でこそこそ話しますからね。――それは本当に罪ではないのです。おわかりになりませんか？　そして、あれをしてもらわなきゃならないと私が言ったとき、彼女は反論しませんでした。ああ、もしまだ生きていれば、彼女は証言できるでしょう。私が根本的に説明した後で、彼女がそれにすっかり同意したことを。もちろん、彼女はそれに不安を持っていました。しかし、彼女は本当に反論しませんでした。いいえ、彼女は本当にそれに同意したのです。私は一人で踊りに行くつもりも、楽しみに行くつもりもありませんでした。それがどういう結果になるかは、おわかりでしょう。よりによって、すべての人々が踊りに行き、楽しみに行くカーニバルの時期に、彼女が太ったというだけで、結婚が破局にいたることを、私は本当に望んでいませんでした。いいえ、私は本当にそんなことを望んではいませんでした。もし結婚が破局にいたったとすれば、市場じゅうで、それどころか大変多くの人々が私を知っている町の下の方で、どんな話しがされたことでしょう。いいえ、そんなことになってはいけませんでした。私は彼女にそう言いました。彼女はたしかにあれに不安をもっていましたが、実際は同意していたのです。なんということだ、彼女は恐るべき不安を持っていたに違いありません。というのも、あれをしてもらわなきゃならないと私が言ったとき、彼女の顔は蒼白になったのです。そして、彼女は一言も発せず、どもりながら馬鹿げたことを口にしたのです。しかし、実際は、彼女は同意していたのです。それは、彼女があれをしてもらったことからしてもわかります。」ああしたことをそう高くないお金でしている女のところで、彼女はあれをしてもらった。そして、二日後、痛みがあまりにもひどくなり、もはや彼にそれを隠しておけなくなった。そして、彼自身もすでに、なぜ彼女が水をそんなに沢山飲むのか、不審に思っていた。しかし、彼は、こう言って彼女を落ち着かせた。「当たり前だよ。お前。ああしたことの後なんだから。」だが、三日目には、彼女は泣き、そして四日目には、彼女はもうまったくなにも話さなくなり、苦痛のあまり身体を曲げて、下の居間の寝椅子の上に横たわり、

そして、ときおり唇を動かした。彼があれをした女のところへ行くと、女は彼にお茶の入った小さな袋を渡した。彼はそのお茶を沸かし、それを彼女の口に流し込んだ。お茶を飲んだ後、彼女は良くなったように見えた。しかし、彼女はもうなにも話さず、泣きもしなかった。昼過ぎ、彼女は、まるでなにかを払いのけねばならないかのように、両腕で自分のまわりを叩き始めた。そして、すこぶる具合が悪いときには、彼女は寝椅子から飛び降りようとした。うめき声と落ち着きのなさとともに寝室でそばに横たわれば、彼がそれを我慢出来なかっただろうから、彼女は、寝椅子の上に横たわっていた。彼女がもう話さなくなったとき、そして彼女の身体の力も弱まり、そのため彼女の腕の動きが、後ろに引いたり、振ったりする最中に中断するようになったとき、さらに、彼女がもはや彼を見つめず、次第に目を虚ろにしたとき、彼は医者を呼びにやったが、手遅れだった。腹壁は板のように固い手触りで、医者の指が押すたびに、彼女は、一方の側から反対側へと、不機嫌に頭を投げた。とても見ていられなかったので、診察の間、彼は窓にもたれ、ずっと外を見ようとした。医者は、血のついた薄い分泌物に気づき、男になにがあったのか聞いた。しかし、彼はなにも言わず、二・三日前に始まったが、彼女はいつも並外れて我慢強く、病気になっても痛みを隠していたとだけ言った。突然、医者が聞いた。「彼女はいつから妊娠していたのです。」彼はこの質問に驚いた。というのも、彼は、医者がそれを推測するとは予期していなかったからである。彼は、自分がどんなに驚いているかということに自ら気づき、そのことが彼を狼狽させたが、それは、この驚きが本来いかに便利なものであるかを思いつくまでのわずかな間だった。そして、この驚きを考慮して、彼は返事した。「そうですか、彼女は妊娠していたんですか?」そして、彼は考えた。いいえ、先生、あなたには私を捕まえられませんよ! 医者は譲歩せず、再度聞いた。「おや、彼女は本当に妊娠していなかったのですか?」しかし、彼は言った。「なんということだ。あなたは、私がそのことを知っていなければならなかったとはお思いにならないでしょう? 私は盲腸だと心配していたのです。」そして、少し間をおいた後、彼は続けてこう言った。「ひょっとしたら、彼女は本当に妊

娠していたのかも知れませんが、私にはなにも言いませんでした。ある意味で、驚きです。でも、そもそも私には、彼女が妊娠していたとは、本当に信じられません。」その間に、医者は、彼女にモルヒネを注射した。そして、彼は、それによって彼女が落ち着くのを観察した。そのように斜めに寝椅子に坐り、小さい両足が床までぶら下がっていると、彼女は、まだ十分発育していない子供のように、とても小さく、か細く見えた。頭は後ろへ沈み、枕の間にねじ込まれていたが、彼女はときどきそれを上に伸ばした。ほとんど閉じたまぶたの間に、上の方へねじ曲げられた眼球が見えた。医者は、なお幾つかの質問をしたが、男はなんなくそれに答えることができた。結局、医者は、もはやまったく希望はありません、病院へ連れて行こうとすれば、彼女は確実に搬送中に死ぬでしょう、と男に説明した。そして、医者は去り、彼が二時間半後に再び来たとき、彼女はもう死んでいた。医者は男に言った。「もう手遅れです。あなたはもっと早く私を呼ばねばなりませんでした。」男は黙って窓の外を見た。そして、医者がもうなにも言わなくなった――その間に、彼は死者のまぶたを閉じた――とき、彼はすすり泣き始めた。しばらくたった後、彼は再び気を取り直し、必要なことを指示した。しかし、彼は、死亡証明書を手に入れられなかった。医者は言った。「それは町の医者の仕事です。いずれにせよ、私はこの件を届けねばなりません。」そして、彼は去った。男の妹が来、そして、彼女と一緒にもう一人女が来た。そして、この二人の女が、死者を拭き、そして新しい服を着せた。彼は彼女らに言った。「あなたたちはわかってくれるに違いない。私には、今なにも出来ないんだ。」動かず、蝋のように黄色い死者とかかり合う必要がなくなったことを、彼は喜んだ。しかし、彼は、彼女を棺台に安置するために、すべての準備をした。そして、彼女が新しい服を着たとき、彼らは、三人がみな協力して、死者を、高くされ、黒い布で覆われた寝椅子の上に持ち上げた。彼は、後ろから彼女の肩の下をつかんだ。そして、彼が彼女を持ち上げると、彼女の頭がぐらぐら揺れて、後ろに落ちた。心臓が一度氷のように冷たく鼓動する間に、彼は、彼女の冷たい頭を頬に感じた。彼は唇をきつくしめ、息をするのをこらえた。寝椅子のそばに、彼らは蝋

燭を一本灯した。買わなければならないものがとても沢山あったので、女たち二人は、彼を一人にした。彼の妹は、もう一度戻って来て、彼に聞いた。「彼女の両手を組み合わせた？」彼はまだそれをしていなかった。だが、彼は、敢えて妹にそれを頼もうとはしなかった。できるようになったとき、彼はそれを注意深く、大急ぎでした。細く黄色い指は、彼の指の圧力で、簡単に曲がった。それを彼は、ほどよく熱した蝋のように曲げた。そしてとうとう、彼女は両手を組み合わせた。彼は、部屋の中を行ったり来たりした。なん人かの人が来て、死者を観察し、聖水を少しかけた後で、彼にお悔やみを言った。ときおり、彼には、彼女がまだ動いているかのように思われ、そのとき、彼は目をそらした。彼が再び見つめると、彼女が丁度動いているように思われた。だが、よくよく見れば、彼は、彼女が動いていないことに気づいた。彼には、彼女がこれまでになく細く、小さいように見えた。それが、彼が認めた唯一の変化だった。また、彼女はとても平たく横たわっており、それも彼の注意を惹いた。もちろん、できれば彼は見つめたくなく、窓からずっと外を見ていたかった。女たちは買い物から戻っており、家の中を動き回った。だが、彼女らは足音を忍ばせて歩いたので、静けさが家中を満たした。突然、彼は上で子供が泣きわめくのを聞いた。子供のことは、彼はそもそも考えていなかった。なだめるため、彼は子供のところへ上がって行った。彼は下から逃れられたことを喜んだ。しかし、そのとき、町の医者が来たので、女たちが彼を下へ呼んだ。彼らは、この件について話し、そして彼が言った。「なんということだ。私がなにか感づいていれば！」町の医者は聞いた。「彼女はいつから妊娠していたのです？」彼は叫んだ。「とんでもない。そんなことはありませんでした！　彼女は妊娠していませんでした。私はそのことを知っていなければならなかったのですが。」そして、彼は聞いた。「そうですか。では盲腸ではなかったのですか？」町の医者は、顔をそむけて言った。「誠に申し訳ありません。しかし、なんであったかは、検死が明らかにするでしょう。申し訳ありませんが、他にしようがありません。死体をその前にお引き渡しすることはできないのです。」男はそんなことは考えていなかった。彼は熟慮してそれを克服できるまで、

かなりの時間を必要とした。それから、彼は医者に言った。「本当なら、私はそのことを知っていなければならなかったのですが。しかし、彼女がそうであったのに、私にそのことを言わなかったということもありえます。女というものは、しばしば人になにも言わないものなのです。」彼は、検死のときに、すべてが駄目になるかも知れないということをよく考え、こう続けた。「私たちの最初の子のときが、まさにその通りでした。特に早朝、起きて間もなく、そうたびたび吐かねばならない理由を私が尋ねるまで、彼女は二ヶ月間なにも言わなかったのです。」そして最後に、彼はさらにこう言った。「彼女はもともと本当の子供好きではありませんでした。ひょっとしたら、それで、彼女はそのことについてなにも言わなかったのかも知れません。」そして、彼は、再び窓から外を見、こう思った。いや、彼らは本当になにも私に証明できないだろう！　町の医者は、なお幾つか質問し、そして去った。彼はピアノのそばの大きな置き時計を見た。時計は、丁度四時を指していた。それは、彼女の死亡時刻だった。彼の妹が、やって来たときに、その時計を止め、針を巻き戻していた。そのため、部屋の中は、とても静かだった。もうそろそろ夕方で、そして死者のそばの蝋燭は、下まで燃えてしまっており、そして炎は、わずかに残った蝋の上で、すすを出しながらゆらめいていた。彼には再び、彼女が動いているように思われた。そこで、彼は間近に寄って、彼女を観察した。そのとき、彼は、彼女のあごが首まで下がってしまっているのを見た。彼は、手を伸ばして触れ、それを押し上げようとしたが、あごはとても固く、硬直していた。彼女は、上から下まで、固く、硬直していた。彼女の口を閉じることは、彼にはもはやできなかった。彼はもう一度それを試み、素早く、激しくあごを押した。しかし、それによって、身体全体の位置がずれ、頭が、それが載っている枕をしわくちゃにした。口は開いたままで、もはや閉じられえなかった。口は、とても大きく、卵の形で下へ広がり、木の色の唇に薄く縁取られて、開いていた。彼が数日前に殴ってつくった、歯のあいだの隙間も見えた。アッパーカットなら彼女の口を閉じることができただろうに、と医者は後で思った。しかし、今、男は、彼女に触れるのを恐れた。彼にはそれが出来なかっ

た。この開いた口が、見るも恐ろしかったのだ。彼はその間ずっと持ちこたえていたが、それは彼にはひど過ぎた。そして、もはや口を閉じられないとわかったとき、彼はすべてを話した。

（出典　ヘルベルト・アイゼンライヒ『私の妻のともだち、およびその他十九の短編』ディオゲネス出版社〔チューリヒ〕一九七八年。）

■解釈

一、略伝と著作に関する指摘

オーストリアの作家ヘルベルト・アイゼンライヒは、一九二五年二月七日、銀行員の息子としてリンツに生まれ、ヴィーン、および上部オーストリアで幼年時代を過ごした。ヴィーンの中等学校終了後、この十八歳の青年は、軍隊に召集され、西部戦線で重傷を負った。一九四五年から一九四六年までに、アイゼンライヒは、マトゥーラ（大学入学資格試験）を受け直し、ヴィーンでドイツ語ドイツ文学の勉強を始めた。しかし、様々な仕事で自分の生活費を稼ぐために、彼は、短期間の後すでに、勉学を諦めた。一九五二年から一九五六年の間、アイゼンライヒは、ドイツ連邦共和国で、フリーの作家として、とりわけラジオと新聞雑誌の文芸作家・批評家として働いた。またこの時期に、ここで話題とされる短編『ある耽美家』も成立した。それは、一九五三年、雑誌『フランクフルター・ヘフテ』に掲載され、後に、短編集『私の妻のともだち』に収録された。

この作家は、一九五三年、『彼らの罪深さの中でも』でもって、その最初の長編小説を世に問うた。それは、ドナウ王国（オーストリア＝ハンガリー帝国〔一八六七―一九一八年〕の別名＝訳者注）崩壊後の、いわゆる「失われた世代」の

家族の運命を扱っている。一九五五年にまず放送されたラジオドラマ『私たちはなんによって生き、なんによって死ぬのか』は、大いに注目された。『反応――文学についてのエッセイ』（一九六四年）において、アイゼンライヒは、彼の詩論的綱領を提示した。彼は、――現代文学とは一線を画し――叙事的芸術作品における「全体性」の概念に固執することに尽力しており、歴史欠如という批判を甘受する実存的立場を信頼している。

彼の作品の焦点をなしている短編において、大変繊細に、本質的なものへのまなざしをもって描かれるのは、個人的・社会的挫折へいたる心の悩み、つまり、不安、疑い、誤解、および寡黙である。作品集『悪しき美しき世界』（一九五七年）からとりわけ有名になったのは、物語『ゴールにて』であり、それは、種々のアンソロジーに収録された。他の物語集とならんで、すでに言及した作品集『私の妻のともだち』（一九六六年）が出版されたが、それは、有名な短編『外への道』を含んでいる。一九七六年には、物語集『美しき勝利、およびその他二一の誤解』が出版された。断片に留まった第二の長編小説『古び去った時』は、一九八五年に出版された。叙事詩、ラジオドラマ、エッセイと並んで、アイゼンライヒの詩集、およびアフォリズム集もあげられねばならない。

ヘルベルト・アイゼンライヒは、数々の賞を受賞した。とりわけ、一九五四年の南ドイツ・ラジオ放送の物語賞、ブレーメン・ラジオのラジオドラマ賞（一九五五年）、イタリア賞（一九五七年）、オーストリア国家賞（一九五八年）、およびフランツ・カフカ文学賞（一九八五年）である。

この作家は、一九五八年から一九六七年にかけてザンドゥル（上部オーストリア）に、その後数年間イストリーンに、そして最後はヴィーンに住み、その地で、一九八六年六月六日、重い病気の後に没した。

二、形態的特徴

二、一、短編の構造

短編『ある耽美家』の外的構造は、その内的構成を隠している。というのも、アイゼンライヒは、節を完全に放棄してしまったからである。したがって読者は、内容的構造の概観を楽にしうる視覚的な補助を奪われることになる。罪と死と贖罪のもつれを解明したければ、読者は、いわば、テクストの道なき山野の様子を自分で明らかにせねばならないのである。筋の構造から見れば、冷酷に強要された、死にいたる妊娠中絶を内容とするこの物語は、大雑把に三つの部分から成っている。すなわち、犯行、嫌疑、および告白である。また、物語は、文字通り引き継がれた、ごくわずかだが決定的に異なる情報を加えられた導入の文章で終わっており、その限りにおいて、語りの構造は、**循環的**と呼ばれうる。ある意味で、この物語は、後ろから順を追って話されるのである。そのことは、語りの技法の観点から見たとき、物語の精巧さをなし、物語に特殊な緊張感を与えている。

この短編が直接**転換点**で、つまり嫌疑と告白との接点で始まるということは、読者には、当初見分けられない。「それを見たときついに、彼はくずおれた。彼はその間ずっと持ちこたえていたが、それは彼にはひど過ぎた。」すぐに二度言及されており、読者の注意が向けられるべき、謎めいた指示代名詞「それ」がなにを意味しているのかは、さし当たり、未決定のままである。それについての説明が補われるのは、すっかり結末にいたってからである。

物語の第一文で問題となっている、精神的ないしは身体的に「くずおれること」は、「そして、彼は言った」という文で導かれるかなり長い**独白**、つまり告白の外面的きっかけをなしている。すなわち、夫が、その非人間的行為の動機を明らかにし、自分の妻を、彼によって要求された不法な妊娠中絶へといかにして駆り立てたかを語るのである。

多くの自己弁解で繰り返し中断される彼の告白の言葉に、出来事の順を追った**回想**として続くのは、中絶についての語

り手のかなり要約された報告、およびその後に生じた妻の身体的苦痛の、幾分長い叙述である。

短編の昼間部における医者の登場でもって、嫌疑と、それを自分からそらそうとする男の努力（「そして、彼は考えた。いいえ、先生、あなたには私を捕まえられませんよ！」）の段階が始まる。相談されるのが遅すぎたこの医者、および町の医者は、この妻の死が失敗した妊娠中絶によってもたらされたことを、相次いで、正しく推測する。この嫌疑に対して、男は、いずれの場合にも、まず見せかけの無知を（「なんということだ。あなたは、私がそのことを知っていなければならなかったとはお思いにならないでしょう？」）、続いて、死んだ女性の容疑、ないしは彼女に対する直接の告発を持ち出す。つまり、「彼女はもともと本当の子供好きではありませんでした。」

男が死者と二人きりになり、「彼が数日前に殴ってつくった、歯のあいだの隙間」がもはや無視されえなくなったときようやく、「彼はすべてを話した。」開かれた口の「見るも恐ろし」い光景は、この短編の**クライマックス**をなしている。美的衝撃というこの運命的瞬間が、「ある耽美家」の犯した罪の告白への転換を引き起こす。すなわち、環は閉じられたのである。

二、二、語りの態度と言葉

アイゼンライヒの短編における出来事の語られた経過は、大部分が男の視点から再現されている。その結果、――中立的な語り手の声が聞かれうる若干の文章を除けば――**作中人物に反映する語りの態度**が問題とされうる。この確認は、最初の表面的な印象に反して、物語の第二の文「彼はその間ずっと持ちこたえていたが、それは彼にはひど過ぎた」にも妥当する。すなわち、ここでは、「持ちこたえていた」という表現は、局外の語り手の、皮肉っぽい称賛を意味する解説として理解されるべきでは決してない。そうではなく、その表現は、男の内面的態度、ないしは自己評価を描いている。彼

は、彼に反対する外面的状況にもかかわらず、医者と町の医者の前でしばらくの間言い逃れができたことで、少しうぬぼれているのである。「それは彼にはひど過ぎた」という言い回しも、当該の人物自身の後からの視点から理解されねばならない。彼にとって言葉で言い表せない「それ」でもって、彼は、自分の突然の告白の理由を洩らしているのである。それに続く長い独白においては、彼の視点から私の視点へと交替がなされるが、語りの態度は、作中人物に反映した態度のままである。つまり、男は、内密にもくろまれ、禁止された妊娠中絶へといたった彼の振る舞いを、それ以上詳しくあげられないある人物に対して理由づける、ないしは詫びているのである。

スタイルの点では、独白とそれに続く語り手の報告との間に、断絶はない。**日常語の調子**が維持され、それどころか、若干の言い回しが、同じ様な形で取り上げられる。例えば、妻の最初の妊娠に付随する状況を記憶に呼び起こしたとき、男は、文字どおり、「彼女の様子が本当にひどかったこと」(„es war ja wirklich zu arg wie sie's trieb“) と言う。そして、中絶後の苦しみが（今度は「彼」の語り手の視点から）話されるときには、「そして、すこぶる具合が悪いときには、彼女は寝椅子から飛び降りようとした」(„und wenn es ganz arg war, versuchte sie, vom Diwan herunterzuspringen.“) と言われる。この文は、男によっても、文字どおりそう口にされえたかも知れない。「結婚が破局にいたること」(„daß meine Ehe in Brüche geht“) とか、「妊娠」(„schwanger“) という概念の「太った」(„dick“) という語による言い換え、「彼は、検死のときに、すべてが駄目になるかも知れないということをよく考え、[……]」(„Er überlegte, daß bei der Obduktion alles auffliegen würde, (...)“) といった表現も、（文における個性的な、方言に帰される配語と並んで）日常語的なものである。

加えて目立っているのは、通常なら文字どおりの発話にのみ用いられる**省略符号**の利用が、独白 „und ich sagte ihr's, (...).“（「私は彼女にそう言いました。」）から語り手の報告 „Er lief zu der Frau, die's gemacht hatte, (...).“（「彼があれをした女のところへ行くと、[……]。」）へと引き継がれていることである。このようにして、独白と報告の間の境界は、ほとん

ど消される。その結果、読者は、出来事の経過を、男の目で見るようにごく間近に提示され、語りの媒介によって生ぜしめられる距離なしに、男の心の中へ移されるのである。さらにもう一つの意味での省略符号の利用も、注目に値する。というのも、それは、言葉の排除という機能を含んでいるからである。つまり、„s“へと縮められた„ß“でもって、中絶が考えられているのである。それは、なにか言葉で表せないもののごとく、恥ずかしさ、ないしは罪の意識を伴うので、決して名前では呼ばれないのである。

さらに、『ある耽美家』の言葉上の構成の主要特質は、そのスタイル上の簡素さにある。その本質的な特徴は、テクストが示している語の、それどころか文の多くの**反復**である。このことは、すでに何度も話題になった独白に、特別な度合いで当てはまる。つまり、ほとんどすべての文が、少しの変化をつけて、幾度も叙述されるのである。例えば、「カーニバルの時期に、踊りに行き、楽しみに行き」――「すべての人々が踊りに行き、楽しみに行くカーニバルの時期に」（二度）――「カーニバルの時期に、踊りに行きたい、楽しみに行きたいと思うのは、〔……〕。」男の型にはまった反復は、妻に死にいたる中絶を強いたことに対する理解を得ようとする、彼の途方に暮れた、と同時に無駄な試みを示している。この場合、言葉の貧しさは、内面の貧しさを証明しており、それが、弁明のために、型通りにほとんど同じことを言うよう彼に強いる。精神と感情の面でと同様に、言葉の面でも、彼は、その狭い視野を越えられないのである。

男が問題とならない文においても、反復が見出される。「男の妹が来、そして、彼女と一緒にもう一人女が来た。そして、この二人の女が死者を拭き、そして新しい服を着せた。」この厳密に**並列的**なスタイルは、そのほとんど**古風な**飾り気のなさという点で、聖書の文章を思い出させる。――この関連については、「短編の意味内容」の章で、より一層詳しく考察される。

しかし、それとははっきりと対照的に、従属文も見られ、それらは、ほとんど**模倣的な**やり方で、死を前にした妻の身

体的苦痛、痙攣、弛緩を表現することが可能である。すなわち、「彼女がもう話さなくなったとき、そして彼女の身体の力も弱まり、そのため彼女の腕の動きが、後ろに引いたり、振ったりする最中に中断するようになったとき、さらに、彼女がもはや彼を見つめず、次第に目を虚ろにしたとき、彼は医者を呼びにやったが、手遅れだった。」

家の中にいる死者を目の当たりにして、不気味な静けさが生じるが、放置された子供が、その中へと声高に現れる。この奇妙な雰囲気と、それを消し、少しの間男の内面の緊張を緩める断絶を、語り手は、目立って多くの**頭韻**（語頭や句頭に同じ音を反復する文彩＝訳者注）によって強められた並列の助けによって、捉えている。つまり、„Die Frauen waren von ihren Besorgungen zurückgekehrt und liefen im Hause umher, sie liefen auf leisen Sohlen, Stille erfüllte das ganze Haus, und plötzlich hörte er oben das Kind plärren.“（「女たちは買い物から戻っており、家の中を動き回った。だが、彼女らは足音を忍ばせて歩いたので、静けさが家中を満たした。」なお、原文では、u, l, hau, o, pl, ö などの音に頭韻が見られる＝訳者注）一瞬の間、男は罪の意識からもう一度気を逸らされ、気を静めて、町の医者に自信をもって立ち向かうことができる。しかし、休止はほんの短い間しか続かない。

物語の転換点への導きを、語り手は、スタイルの上で、またもや大変効果的に形成している。すなわち、男が、死者と二人きりで家にいるのである。主文の**多辞的配列**（接続詞を繰り返し用いた配列＝訳者注）が、筋が今や決着へと向かって突き進んでいることを予感させ、また、聞き逃すことのできない、不気味な頭韻が、はっきりと感じとられうる雰囲気の深さを生む。読者は、自分が死に追いやった女性を見たときに男を襲う精神的衝撃に対して、心構えをさせられる。「もうそろそろ夕方で、そして死者のそばの蝋燭は、下まで燃えてしまっており、そして炎は、わずかに残った蝋の上で、すすを出しながらゆらめいていた。」すでにここで言葉がこっそりと洩らすがゆえに、読者は、真実の瞬間が近づいていることを感じるのである。

三、登場人物

短編の題名によって単に「耽美家」という特性しか与えられておらず、一貫して「彼」と「男」で呼ばれている人物の詳しいアイデンティティーは、最後まで明らかにされない。名前、年齢、職業などは、表に出ないままであり、したがって、短編の意味内容にとって、なんの役割も演じていない。男が一度「市場」について語り、そこの人々の噂を恐れているという状況は、彼のもとで問題となっているのが、商人かなにかそれと似たような人物であることを推測させる。しかし、それを指示するものは、他にはない。彼は、短編というジャンルに典型的な、匿名の平均的人間を示しており、その個人的状況は、語られた関連にとって重要なものを別とすれば、未知のままなのである。

彼は、「大変多くの人々が私を知っている町の下の方」での評判を大変重視していることを、彼の結婚の破綻に対する不安を通じて証明している。公の名声と、結婚の状態、つまり私的幸福との間に、そのような関連を打ち立てることによって、彼は、彼にとっては結婚の感情的意味がまったく重要でないということを示している。彼には、結婚そのものよりも、その外面的見かけの方が、明らかにより重要なのである。ついでながら、結婚そのものがいかなる状態にあるかということは、妻の健康と同様、彼をほとんど悩ませない。すでにこのことが、男の自己正当化に、きわめて重要な光を投げかける。そもそも、この男は**利己主義者**であることが判明する。つまり、彼は、その妻を、すでに最初の妊娠のさいに、ひどくなおざりにした。つまり、彼女が苦しんでいるときに彼女を助けたり、差し迫って必要なときに近くに寄り添ったりする代わりに、彼は、内面的にも外面的にも彼女からそっぽを向き、他の部屋で眠る。それどころか、明らかに失敗した中絶の後、妻が痙攣して身悶えしているとき、彼は、「居間の寝椅子」に彼女を追い払う。寝室をまったく自分だけのものとするためにである。彼の利己主義と並んで、ここには、思いやりのなさと感情の冷たさも表れている。

男は、彼が巧妙に演出した芝居を提供する医者との対決の中で、**冷淡さ**、ないしは**冷血さ**も示している。そのさい、彼

には、彼の**能弁**が助けとなる。それを、彼は、自分の利己主義的な利益――彼個人の罪を否認するためであれ、減ずるためであれ――を達成するために、かなりの程度自由に使えるのである。精緻に、十分熟慮して、彼は、妻の妊娠についての医者の予期せぬ質問に対する最初の驚きを利用する。本当の医学的事情についての彼の偽りの無知を、医者に信じさせるために。そのさい、彼の見せかけの悪意のなさを、彼は、「なんということだ」という叫び、およびその後に置かれた修辞疑問「あなたは、私がそのことを知っていなければならなかったとはお思いにならないでしょう?」でもって、**偽善的に**飾りたてる。町の医者に対しても、彼は、「なんということだ」という表現を用いる。彼の当惑と無罪を、たとえ陳腐で修辞的だとしても、宗教的な隠喩に包み込み、彼の言葉により大きな信用を付与するために（「なんということだ」の原語 „mein Gott" を直訳すれば、「神様」である＝訳者注）。

しかし、男の感情の冷たさが最も強く表れるのは、ようやく最後になって初めて姿を現す**残酷さ**においてであり、それは、身体的暴力さえ容赦しない。つまり、苛立つか憤るかして、彼は、妻の顔を強く殴り、そのとき彼女は歯を一本失ったのである。推測されうることは、このことが、後に彼がその記憶の中で、「私が根本的に説明した後で、彼女がそれ（中絶＝筆者注）にすっかり同意した」という言葉で説明している出来事だということである。この男のもとでは、すでに言及した一切の否定的性質にもかかわらず、単に悪い人間が問題となっているのではないことを、次の事実が証明している。つまり、最後に、差し迫った罪の嫌疑にもかかわらず、人が彼になにも証明できないとほとんど思われた時点で、彼が自ら自首することである。暴露する擦り傷だらけの死人の口がいかにすれば閉じられえたかを男に言うのは、よりによって、正しい嫌疑を最初に表明した医者なのだが、このことは、皮肉なやり方で、男がどこに弱みを持っているかを照らし出している。――彼は、自分が引き起こした事柄を直視できないのである。

妻については、読者が聞くことは、大変少ない。外面的体つきについては、彼女は大変弱々しく、華奢に思い浮かべら

れねばならないだろう。また、おそらく、彼女はまだ大変若いであろう。死の床にいる妻から医者が得るイメージは、彼女の身体的状態の叙述を越えて、生前の結婚における彼女の立場にとって、象徴的意味を有する。つまり、「彼女は、まだ十分発達していない子供のように、とても小さく、か細く見えた。」（子供との比較でもって、その中絶が妻の悪い状態を引き起こした胎児があてこすられていることは、言うまでもない。）彼女が、あらゆる観点で「まだ十分発達していない子供」のように夫に従い、彼の野蛮な扱いを、明らかに文句一つ言わずに耐えたことは、すでに次の点から明らかになる。つまり、彼女は、二番目の子供を中絶させるという彼の意志に対し、彼女の無言の絶望の中で、不安のあまり青ざめたり、沈黙したり、どもりながら話すこと以外の抵抗をしないのである。

夫の身体的・心理的優越の結果としての妻の無力は、彼女のもとでは、寡黙の中に（「彼女は反論しませんでした。」〔二度〕「彼女は一言も発せず、〔……〕。」）表れている。それどころか、この寡黙は、断末魔の苦しみの中にまで保たれる。すなわち、「そして四日目には、彼女はもうまったくなにも話さなくなり、〔……〕。」夫の言葉による、また言葉によらない暴力、ないしは暴力的行為に抵抗できず、彼女は、――無抵抗の犠牲として――彼の野蛮な振る舞いを、酷い最後まで耐え、ただ「ときおり唇を動か」すだけであるが、それは無言の非難と解釈されうる。彼女が死の直前、「まるでなにかを払いのけねばならないかのように、両腕で自分のまわりを叩き始めた」とき、そこには、死によってでなければ完全に逃れられない夫の非人間的圧迫から逃れようとする、最後の絶望的試みが見られる。開いたままの口でもって、彼女は、声なき告発を掲げ、それによって、最後に、彼女の寡黙を克服するのである。

四、短編の意味内容

『ある耽美家』のテーマが、妊娠中絶の法的規制という、長年激しく議論された問題に還元されるならば、この短編の

関心事を軽視、縮小、あるいは誤解しさえすることになる。中絶というテーマは、大変根本的な種類の問題に対する素材的背景を演じているに過ぎない。つまり、アイゼンライヒにとって問題なのは、罪の成立、告白、および克服という問題、ならびに隣人ないしは周囲の人々とのつき合いにおける、道徳と責任の関係である。

男の罪深い存在の中心にあるのは、見栄えのするもの、美しいものに対する際立った感覚である。この短編の題名における、ごく皮肉っぽく考えられた「ある耽美家」という名称が、すでにそのことを証明している。しかし、彼の美の感覚は、精神的な美に対する感性を意味してはおらず、実体のある感覚的なものの表面に結びついたままである。行為の成りゆきの引き金となる要因、つまり動機がすでに、この種の美学、および享楽と幾らか関連している。すなわち、男は、カーニバルのパーティへの参加を、妻の妊娠という理由で諦めたくはないのである。ここで、この短編の成立時期（一九五三年）との関連で明らかになるのは、第二次世界大戦の恐怖、つまり破壊、飢え、困窮を意識的にともに体験した若い世代の一部をも、ドイツとオーストリアにおいて、あの戦後時代に特徴づけた性質である。すなわち、戦争状態によってなおざりにされたもの、とりわけ楽しむこと、陽気であることを、広範囲に取り戻し、人生を障害なく享受したいという願望である。この利己的な生への渇望を目の当たりにしたとき、男にとっては、妻および生まれつつある生命を顧慮すれば適当だったであろう道徳的熟慮は、疑いなく退いていなければならない。それどころか、さらに、彼の記憶の中では、男は、彼が妻に中絶を説得した（もちろん実際には強制したのだが）ことを、正当なこと、少なくとも理解されうることと感じている。つまり、「おわかりになりませんか」、「罪ではありません」、そして、最後には、自分の無罪の誓いを強調するため、もう一度、「それは本当に罪ではないのです。おわかりになりませんか？」

カーニバルでは、妻は「美し」くなければならず、「太って」、「ヒステリック」であってはならない。結局、彼は、彼女を、自分の享楽の願望の対象として、美的な付属品として計算していた。つまり「美しい女性と一緒にいたい」と。妻

なしでカーニバルへ行く可能性を、彼は、なるほどすっかり考慮したが、しかし、結婚を危険に晒さないため（「それがどういう結果になるかは、おわかりでしょう。」）、それを退ける。自分が罪を犯したのは、他の女性による美的、または性的誘惑に晒されないために過ぎないことを表明するために、彼は、偽善者の仮面をかぶる。この顧慮のさい、彼にとって問題だったのは、妻ではなく、人々の噂だけであったことは、すでに言及した通りである。

最終的に呼び寄せられた医者が妻を診察したとき、男は「とても見ていられなかったので、〔……〕窓にもたれ、ずっと外を見ようした。」「耽美家」の美的感覚と平行して現れる非人間性と冷淡さは、妻の身体的苦痛を目の当たりにした彼の振る舞いにおいても継続する。つまり、彼は、彼自身によって引き起こされた不幸の証人とならぬよう、顔を背けるのである。というのも、彼は、彼の罪からのぞいている醜さを直視することに耐えられないのである。彼は、「とても見ていられな」い。なぜなら、彼は、ほとんど想像もできない野蛮な行為をする能力はなるほどあるが、その結果、ないしはそれを具体的に観察することには直面させられえないからである。その直後に妻が死んだ後、目を背けるこの経過が繰り返される。つまり、「男は黙って窓の外を見た。」その後、彼は、幾人かの女性が彼から仕事を引き受けたため、「動かず、蝋のように黄色い死者とかかり合う必要がなくなったことを〔……〕喜」ぶ。町の医者が現れたとき、彼は三度目に、彼の罪を否定し、「再び窓から外を見」る。それどころか、彼は、ここでもまだ罪を逆転させる。死んだばかりの妻を悪い母親として非難し、彼の了解なしに中絶したという罪を、直接彼女にきせることによって。そのさい、丁度明らかになるのは、彼が悪い父親だということである。なぜなら、泣くことによって、子供が自分に注意を引きつける前には、「子供のことは、彼はそもそも考えていなかった」のだから。

この男の姿の中には、罪の抑圧の成功という個人的、と同時に集団的現象も見られる。それは、丁度最近の歴史の中で、破滅的な仕方で現れもしたものである。氷のように冷たい唯美主義の背後には、むき出しの野蛮さが隠れている。つまり、

美的感覚は、利己主義の隠れ蓑なのである。その利己主義は、他者の利益を、物理的破滅という結果にいたるまで黙殺する。妻の死がもはや防がれえず、彼女がもはや自ら真実を口にできなくなったときようやく、男は医者を呼ぶ。医者に対して、なにも知らない者を装うためにである。不道徳の醜さはうまくフェードアウトされ、なにも知らない者を振る舞うことで、退けられる。偽装と言い逃れでもって、彼は、妻の恐るべき死への一切の関与から、言葉の本来の意味で自分を「罪なし」としようとするのである。

妻の口をふさぎ、身にふりかかったことを彼女が証言するのを妨げることがあらゆる観点で成功し、その上、彼自身の利益のために彼女を中傷した後、聖書の裁きのように不意に、正義が彼を襲う。まだその少し前には、彼は、不遜に自己を過大評価し、「いや、彼らは本当になにも私に証明できないだろう！」と、意地悪な喜びを感じていた。そのとき、彼は、ゆらめく蝋燭の光の中に、思いがけず、「歯のあいだの隙間」がある妻の醜く開いた口を見る。ここで、彼の美的感覚が、ついに彼に追いつき、報復者となる。この「耽美家」は、彼自身の弱点に捕まえられる。つまり、「この開いた口が、見るも恐ろしかったのだ。」この開いた口によって、死人が、予期せず、もはや否定されえぬ行為の雄弁な証人となるのである。

自ら出頭するにせよ、男は、彼の自発的告白の中でもその上まだ、言葉の形で、この否認の行為を繰り返す。すでに詳述したように、彼は、生への渇望（カーニバル）の道徳的正当化を幾度も強調しており、彼の陳述の中では、事実経過の輪郭は、「実際は」という言葉を用いることによって、すでに再びぼやけさせられる。つまり、「しかし、実際は、彼女は同意していたのです。」ごまかしと自己欺瞞の間の境界が、徐々に流動的になる。そしてもうまもなく、男は、自己の道徳的無罪の断言に、自ら信頼を置くだろう。すなわち、醜悪なイメージ――「歯のあいだの隙間」のイメージもまた――は、彼の意識の中で色あせ、しかも、彼の良心を欺くだろう。そして、この抑圧のプロセスは、成功裏に終わるであろう。

付記

この翻訳の底本は、Rainer Könecke: Interpretationshilfen Deutsche Kurzgeschichten 1945-1968. 12 Texte und Interpretationen. Sekundarstufe II. Stuttgart/ Dresden: Klett 1994, S. 95-110, „Herbert Eisenreich: Ein Ästhet (1953)“ である。原文においてイタリック体で強調されている箇所は、訳文ではゴシック体で表記した。『ある耽美家』の訳は筆者の知る範囲では本邦初訳であり、また訳文に関しては、いわゆるこなれた訳よりも、解釈の部における文体的特徴についての指摘が日本語でも理解できるよう工夫することを優先した。なお、解釈で使用された「語りの態度」に関する概念の理解については、拙訳「ヴォルフガング・ボルヒェルトの『パン』（一九四六年）について」（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第五二号〔平成十二年〕、四一～六〇頁）の「付記」（五九～六〇頁）を参照されたい。